

博多祇園山笠の歴史とこれからの展開

History and expansion of Hakata gion yamagasa festival

1K05B153

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

梶尾 怜

副査 石井昌幸先生

2008年に行われた第29回夏季五輪大会である北京オリンピックにおいては、真の「超大国」入りを目指す中国による政治色が濃い大会となった。聖火リレーを巡る混乱ぶりにも見られるように、人権問題、環境問題、多くの不平等な扱いによって生じる、問題に対しての抗議活動を起こすチベットに、世界中からの注目が集まる大会となり、この大会の異質性を際立たせていた。

自分は旅が好きで、バックパッカーとして多くの国々を訪れる際にチベットにも足を運んだ経験がある。チベットに立ち寄った際には豊かな自然と人々の暮らしぶりに非常に好感を覚えた。まったく見ず知らずの異国の自分に対して、温かく接してくれる人々が多く住んでいた事は、私の旅の中でも一に二を争うような喜びを感じた。だが、チベットにはそんな明るい面だけではなく、日本で報道されなくて、公に出ることはないような弾圧の歴史があるということも現地の人々から耳にした。恵まれている日本という国で生活をしている自分は、この事に少なからずショックを受け、多くの人にこの事実を伝えていきたいと考えた。そこで、本論文では、この聖火リレーなどの湧いた北京オリンピックで起こったチベット問題に対し、過去の政治介入や、テロなどの脅威にさらされたオリンピックの歴史を振り返りながら、平和の祭典が持つ本当の意味について考察した。

1896年クーベルタン伯爵が近代オリンピックを提唱し、古代オリンピックの祭典としての意味合いを脱却し、マスメディアやマスコミュニケーションとともに、飛躍的に発展していったことにより、近代オリンピックは現在のような、世界最大規模の

スポーツの祭典という形で存在している。だが、現在のオリンピックは世界的な商業化問題、ナショナリズム、宗教、人種などさまざまな問題を抱えており、政治の介入はそのひとつである。その歴史は深く多くの大会で政治絡みの大会が開催されているが、ナチスドイツによる国民高揚や、ベルリン大会でのパレスチナ・ゲリラによる選手死傷テロはその顕著な例である。

今回の北京五輪では、チベットの抗議活動に対しての、中国の人権侵害をするような対応に多くの非難が寄せられ、「チベットに自由を」という「FREE TIBET」は各国の聖火リレーを中心に盛り上がりを見せた。日本の長野聖火リレーでも、善光寺のスタート地点の辞退が起こったり、当日のリレーでは多くの警備が成果を取り囲みながらリレーをする激しいものとなった。

そこで、チベット問題が五輪期間中に、どれほど日本メディアに取り上げられているかを調査するために、大手全国紙である、朝日新聞と日本経済の2紙の分析を行った結果、オリンピックの開幕と閉幕前後に最も多くの報道がされていた。ここで分かるように、今回の北京オリンピックでは、政治的介入が行われていた大会であり、その影響はオリンピックの関心に合わせ、マスメディアによって、報道されていたのである。そんな負の面ばかりが強調されているが、今回のオリンピックでは歴代最高の国と地域から多くの選手が参加し、また辞退が多く出るとされていた各国首脳者達も、蓋を開けてみれば、世界各国から80人以上もの各国首脳者たちが集まり、五輪史上例を見ない首脳外交の舞台となり、批判ばかりではなくプラ

スの面も表れていた。

今回の中国が行った北京オリンピックに対するIOCの対応は、内政干渉をしないとの理由で中国に対して非難をしなかった。だが、本当の意味での平和の祭典という意味を、世界最大級の平

和の祭典であるオリンピックに持たせたいのであれば、政治とスポーツを切り離したオリンピックを目指す事を目指し、政治介入が行われないように、IOCは非難するべきではないだろうか。